

『鞏義黄冶窯発掘調査報告』の刊行

奈良文化財研究所では、2000年度より中国の河南省文物考古研究院と共同研究を実施しています。河南省には歴代の多数の窯跡が存在しますが、なかでも鞏義市に所在する黄冶窯は、日本でも出土する唐三彩を焼成した窯跡であることが知られ、注目されてきました。奈文研ではその重要性を鑑み、同研究院と長年にわたり共同研究をおこなってきました。

黄冶窯では隋代から唐代にかけて焼成された陶磁器類や生産関連遺物が出土しています。奈良市大安寺より出土した唐三彩の陶枕と類似したものもあり、日本で出土した唐三彩の製作地を考える上で重要な知見を得ることができました。考古学のみならず、陶磁史、工芸史、美術史においても貴重な成果です。鞏義黄冶窯の発掘調査報告書は、2016年に『鞏義黄冶窯』という題目で中国の科学出版社より刊行されましたが、このたび、その日本語版報告書である『鞏義黄冶窯発掘調査報告』を奈文研と河南省文物考古研究院が共同で刊行しました。

報告書は本文編、図版編、付論・付表編の3冊からなり、本文編と図版編では発掘調査の成果、付論・付表編では中国でおこなわれた自然科学分析の成果を紹介しています。後者では、日本の文化財科学で一般的に用いられている分析方法とは異なる手法の分析も実施しており、黄冶窯の発掘調査成果とともに日本の学界に紹介する意義は大きいと考えます。

共同研究機関の河南省文物考古研究院、翻訳・修文・校正においてご助力いただいた研究者や大学院生の方々はじめ、ご協力いただいたみなさまに御礼を申し上げます。

(都城発掘調査部 丹羽 崇史・神野 恵)



『鞏義黄冶窯発掘調査報告』

退職にあたり

奈良文化財研究所に令和2年4月に着任するまでは関西圏の大学を6機関経験しました。

京都大学では総合博物館建設、奈良先端科学技術大学院大学ではiPS細胞研究の山中教授と協力して動物飼育実験施設建設、大阪大学では15階建ての高層研究棟建設等に携わり、施設(建築)担当としていろいろと経験させていただきました。

奈文研着任早々、新型コロナウイルスの感染予防のため自宅待機となり、週に数回の出勤体制となりました。慣れない職場で毎日仕事にとりかかれなかった状況でとまどいもありましたが、その時間を利用して奈文研関連資料を読み、仕事の準備ができたことは良かったと思います。

実務からしばらく離れていたこともあり、前任者に問い合わせしながら平城宮跡資料館講堂の天井耐震改修や文化財防災センター開設のための監理棟改修等をみなさまにご協力いただき予定とおり完成させることができました。

また、本研究所では南門復元工事の定例会議に出席し、間近で復元工事の進捗をみる事ができたこと、文化庁の方々に同行し高松塚古墳壁画、キトラ古墳壁画を壁画保管室から間近にみる事ができたこと等、奈文研に勤務していなければ経験できない貴重な体験ができたことは大変ありがたく思います。

2年間という短い期間ではありましたが、仕事において慣れないこともありご迷惑をおかけしたこともあるかと思います。紙面をお借りしてお詫びしますとともに大過なく過ごせたのもみなさまのお陰だと感謝致します。ありがとうございました。

(研究支援推進部 岡本 保彦)



本庁舎正面玄関にて